

～海外派遣者からのレポート～

2007年1月 中国吉林省東北師範大学派遣者 飯野秀樹

1月28日から2月4日にかけて、長春市、吉林市で冬季アジア大会が開催され、私も開・閉会式の視察や競技の観戦に行ってきました。

日本ではテレビ中継もなく、注目度は今ひとつだったようですが、中国では北京オリンピック開催に向けて格好の腕試しとなる大会と位置づけられていたようで、その力の入れようは半端ではなく、開催前から開催期間中にかけて長春市内は大いに盛り上がりました。

まず、長春市内は1月に入ると、大会のメイン会場に通じる自由大路に、たくさんの旗や、大会のマスコットキャラクター鹿鹿（ルル）の模型が賑やかに飾られ、開催に向けていよいよというムードが高まってきました。



街のあちこちに飾られた鹿鹿（ルル）

また、各国選手団は大会開催の4日前ごろから続々と長春入りし、日本選手団も25日に到着。そのころから、選手が滞在する市内のホテルの警備が厳しくなったり、あちこちで警察がパトロールを行うなど、ものものしい雰囲気にもなってきました。

そして、開幕に先駆け、アイスホッケー男子の予選が1月26日から始まり、大会の開幕は28日。

フィギュアスケートやショートトラックの会場にもなる長春五環体育館で華やかに開幕式が催されました。



メイン会場の長春五環体育館

開幕式開始時刻になると、まず、胡錦涛中国国家主席が貴賓席へ入場し、会場全体がものすごい歓声に包まれました。

そして、選手入場と続き、日本選手団も元気に入場行進。韓国と北朝鮮はお馴染みの統一旗で一緒に入場行進。

そして、最後に中国選手団が入場すると一段と高い歓声に包まれました。



日本選手団の入場行進



最後に中国選手団が入場

その後、胡錦涛国家主席の開幕宣言がなされるとまたまた会場全体がものすごい歓声に包まれ、大会旗掲揚、聖火点火と続きました。

聖火は長春五環体育館から屋外にある聖火台まで運ばれ、聖火台下の導火線に火をつけると花火がうち上がり、聖火が点火する仕組み。

オリンピックではいつも聖火がどのように点火されるのか注目されますが、今回の冬季アジア大会でも工夫が凝らされ、また、中国らしい点火で、なかなかおもしろい方法だったと思いました。

その後、選手宣誓と続き、選手退場後、開幕アトラクションの開始です。

中国ではこういったアトラクションは非常に派手にやるケースが多いので、私も楽しみにしていたのですが、今回も、歌あり踊りあり、いろんな仕掛けありでなかなか楽しませてくれる内容となっていました。

それにしても、今回の開幕アトラクションの演技を披露してくれたのは、ほとんどが東北師範大学の音楽学院、芸術学院をはじめとする学生たち。

プロ顔負けのなかなかすばらしい演技を披露してくれたのではないかと思います。



開幕アトラクションの様子



東北師範大学学生による演技

そして、翌日1月29日から長春市をスケート競技、吉林市をスキー競技の会場とし、競技が本格

的に始まりました。

長春市では、メイン会場の長春五環体育館周辺に、スピードスケート、カーリングなどの会場が連立しており、周辺は連日賑やかな雰囲気が続きました。

日本からは、有名どころとしては、スピードスケートの清水宏保選手、岡崎朋美選手やフィギアスケートの村主章枝選手、中野友加里選手などが参加。

しかし、全ての競技でトップ選手が参加したというわけではなく、少し寂しい感じもありましたが、そんな中であって、日本選手団の成績はまずまず。



スピードスケート会場の様子

スピードスケート勢は今ひとつだったようですが、アイスホッケー男子は堂々の金メダル。

フィギアスケートでは、中野友加里選手が金メダル、村主章枝選手が銀メダルと、日本勢が上位を独占しました。

また、吉林市を会場とするスキー競技でも、男子大回転、回転競技で生田康宏選手が金メダルなどうれしいニュースがあったようです。

ただ、競技観戦をして少し残念だと思ったことは、やはり上位成績の選手は、日本、中国、韓国に集中し、この3カ国のメダル争いに終始していたような感がありますし、競技によっては、一国が上位1～3位を占めるようなケースもあり、その場合、3位は4位以下で最も成績の良かった他国の選手に譲るといった特別ルールまででき、大会の競技レベルの低さを感じざるを得なかったことです。



フィギアの村主選手、中野選手

しかし、アジアという一括りの中で冬季大会を開催し、雪のない東南アジアや南アジアの選手が、

日本や中国、韓国のトップ選手と競技を行い、そのレベルを感じることで、アジアのウィンタースポーツの普及、レベルの引き上げといったことには繋がり、スポーツ交流という観点で見れば、非常にいい位置づけにある大会であったのではないかと思います。

また、今回の冬季アジア大会では、様々な新記録が作られました。

競技では12種目でアジア新記録が誕生しましたが、その他にも、参加選手数が過去最多で、26カ国・地域から802名の選手が競技に参加したそうですし、また、20万人の観客が来場したのも過去最高で、座席占有率は90%を占めました。

更には、2,000名余りのボランティアや、1,364名のマスコミ記者が参加したのも過去最多になるようです。

マイナーなところで言うと、201回のドーピング検査を実施したのも過去最多だとか。

次回の冬季アジア大会は、カザフスタンで開催されることになっています。大会規模とともに競技レベルも上げて、更に魅力ある大会にしていって欲しいものです。



アイスホッケー女子の北朝鮮対韓国戦試合終了後互いに親睦を深める選手たち



アイスホッケー男子の日本対中国戦試合は3 - 1で日本の勝利

8日間の熱戦を終え、冬季アジア大会は2月4日に閉幕を迎えました。

閉幕式では、温家宝首相による閉幕宣言後、大会旗が降ろされていくにつれ、聖火台の火も徐々に消えていき、ついに冬季アジア大会に幕が下ろされました。

その後、吉林市歌舞団などによる閉幕アトラクションが催され、アトラクション終了後は10分間程度にわたって花火が打ち上げられ、長春の夜空が鮮やかに彩られました。

## 大会結果

順位	国名	金	銀	銅
1	中国	19	19	23
2	日本	13	9	14
3	韓国	9	13	11
4	カザフスタン	6	6	6
5	モンゴル	0	0	1

大会を振り返ってみれば、長春でこのような一大イベントが開催されることは非常に珍しく、長春市民にとっても、非常に有意義な8日間だったように思います。

チケット代は中国の物価から考えるとそんなに安い価格ではないにもかかわらず、多くの方が観戦に訪れていましたし、また、新聞などでは、大会の開催が吉林の振興を大いに推し進めたという記事をよく目にしました。

また、中国国家にとっても、1年半後の北京オリンピックを見据え、大きなトラブルもなく、大成功と言える大会運営であったのではないかと思います。

ところで、大会には2014年の冬季オリンピックの誘致を進めている韓国の江原道の関係者も視察に訪れていたと聞いています。

鳥取県と友好関係にある韓国江原道でもこのような大きな大会が開催されることになれば、また、鳥取県にとってもうれしい話題になるのではないのでしょうか。



閉幕アトラクションの様子



最後は一面の紙吹雪でフィナーレ

以上、1年間にわたる留学を通じ、できるだけ身近な話題を中心に長春の情勢をお伝えしてきましたが、いかがだったでしょうか。

これにて、1年間の留学生活を終え、日本へ帰国しますが、長春で元気に情報発信し続けることができたのも日本から声援を送ってくださった皆様のお陰だと思えます。本当にありがとうございました。